１９９９．８．９

原爆罹災の長崎医科大学

鬼塚正之

昭和２０年８月９日、この日は天気極めて快晴、澄み切った青空に輝く白雲は流れて、真夏の太陽は朝から炎のように市街を照らしていた。いつもの通り私は出勤すべく市内中川町の家を出て電車に乗ったが、電車が丁度諏訪神社前まで来た時に空襲警報が発令された。乗客と共に植え込みの中の待避壕に入ったが、偶然、学部の学生２名と一緒になったので雑談をしながら警報解除を待った。ふと私は、家族を疎開させるためのトラックが約束通り来ないので大浦の長崎貨物自動車会社に催促に行かねばならない用件を思い出して、大学への私の欠勤届の連絡方を頼んで警報解除後、私は古町で電車を乗り換えた。学生はそのまま大学へ、この古町の分岐点は、今にして思えば運命の分岐点でもあった。

運命の午前１１時、私は配車の確認を得て会社の玄関を下りて数歩路上に出た時であった。突然、一大爆音と共に眼前に巨大な火柱が立った。その瞬間、私は眼がくらむと同時に顔面に激しい熱さを感じた。「しまった。近接焼夷前をやられた。顔面火傷だ。」と思って路傍の溝の中に自ら転げ落ちた。耳目を両手で押さえて、うつぶせになること数分、身辺には無数のパラパラという落下音がする。私はてっきり機銃掃射だと思って、ますます身を縮めた。５分、１０分、漸く落下音が静まったので、頭をあげると、周囲の家々は傾き、屋根の瓦は飛散して路上に散らばっている。だが、火炎はない。確かに一間位先に焼夷弾が落ちた筈だと、いくら見ても跡もない。「おかしいな」と思って空を仰げば、先刻までの青空は砂塵のためにうす暗く曇っている。「これはたいへん、重たん爆撃をくったか」と私は大学へと向かって走った。

数丁も走る内に漸く疲れ、歩行して長崎電話局の辺りまで来た時、偶然、**田中正之氏**と出会った。氏は当時応召中で軍服帯刀しておられたが、「やあ」と声を掛けただけで私は道を急いだ。やっと長崎駅の所まで辿りつくと浦上方面には真っ黒い煙が立ちのぼって空を覆っている。おびただしい人々が浦上方面からやって来る。又こちらからも行こうとする。今のＡＧの下から駅前にかけては人の波だ。浦上方面から来る人を見れば無惨に負傷した人達ばかりだ。着衣はぼろぼろ、いや皮膚はやけただれ、シャツの破れかと見れば背中から腹にかけて皮膚がはげてバタバタしている。頭髪は皆焼け焦げている。惨鼻の極、今その様子を表現するに全く言葉はない。

口々に「浦上はダメだ。全滅だ」と言う。何とかして人波をくぐって岩川町の裏道づたいにでも、大学へ行きたいと途中を尋ねれば「とても通れない」と答える。困ったなと私は人波にもまれてまごまごしている内に誰かが「ガスタンクが危ない。爆発するぞ」と叫んだ。「危ない」口々に叫んで群衆は潮のように四方に散った。

私は大黒町まで退いて、大学へ行くことをとうとう断念した。そして負傷者の職工風の壮年男子を肩にかけて寺町の赤十字病院へと行った。もう数十人の負傷者で庭一杯だった。係の人に負傷者を渡して私は自宅へ帰った。帰ってみれば家は爆風にやられ、家具は散乱

しているが、家族は無事だった。再び第２回の大空襲があると警防団の人々が言うので家族を本河内町に避難させて、その日は暮れた。

翌１０日早朝、私は立山を越して金比羅山の中腹を行けば大学へ行けると思って家を出た。この分では一両日中には帰宅出来ないかもしれないと考えて乾パンを雑嚢のつめこみ、水筒と数本の空瓶に水を入れて身体にくくりつけて出かけた。そして立山コースをとって丁度、立山を超えた頃、再び昨日と同様の負傷者の群に出逢った。「赤十字への道はあちらですよ」と教えて進んだが、金比羅山の中腹の屋根に到ってびっくりしてしまった。浦上方面からこの山への無数の小道は人の姿で真っ黒である。ちょうど、蟻が列をつくって登ってくるように、真っ黒い筋が無数に引かれてある。それこそ数え切れない負傷者の群だ。昨日１日負傷がひどくてこの山を越せなかった人々が一晩かかって、やっと登って来ている姿だった。「水を呉れ」「水を呉れ」口々に叫ぶ。私の携行した水筒もサイダー瓶も、僅かづつ分けてやったのに、瞬く間に空になった。そこで私は再び立山下まで下って水をもらって引き返した。「水を呉れ」「水を呉れ」の叫びは絶えない。私が口に水を入れてやると、そのまま息絶えた人もあった。倒れて動けない人の口に入れてやると、それは既に息絶えた人であったりした。「水を呉れ」「水を呉れ」「済みません。水はもうありません」私はそう言って行かねばならなかった。

こうしてやっと大学病院まで、たどりついたのはもう午後に近かっただろう。見れば大学は廃墟だ。死屍累々、足の踏み入れる所もない。学校の方へ行こうと病院の裏側の道を行った。と病院の南講堂横の防空壕の所へ出た。見れば数名の学生の負傷者がいる。とりあえず、水をくんできて、呑ませたり手当をしていると学生や医者や看護婦の人々に運ばれて**「角尾学長」「高木教授」「山根教授」**が担架にのせられて来られた。「学長先生」思わず私は側にかけ寄った。「ああ鬼塚君か、今からは**古屋野教授**の指揮を受けよ」と角尾学長はしっかりした口調ではっきり言われた。当時私は大学の防空業務の本部員であったので学長はそう指示されたのであった。学長のその時の口調は軍隊口調であった。学長は軍隊口調があまりお上手ではなかった。だが、この頃になると漸く馴れられて、空襲時等は私共に使っておられた－この時の学長の軍隊口調は、それが先生の私への最後の御言葉になろうとは夢想にもしなかったが、あの混乱時に、学長の落ち着いた口調は虫が知らすか、私の心を深く打った。

一先ず防空壕の奥へ先生方を運び入れて、はじめて皆さんと私は話した。「無事でしたか」「ああ、お陰様で」お互いに言葉を交わした。「御真影はどうでしたか」私は一人の学生に尋ねた。「松下先生（当時学生主事）が全身負傷、血達磨になりながら捧持して学生達にまもられて道の尾方面に奉還されました。私が途中で遭いました。」私はこの答に安心することができた。

「さて、どうしましょう」「まず、負傷者を探しましょう」「手分けしましょう」「私は学校へ行ってみます」と言って、私は瓦礫の間を学校に出かけた。

病院の裏門から学校までの道路上には点々と死体が横たわっていた。小川の傍らには数匹の豚の死骸さえあった。学校の門まで行くと、ああ、学校はない。煙はくすぶっているが、建物はない。前庭の大木は黒こげの幹だけを残して、しかもその大半は倒れていた。

唖然として坂を行くと、途中に会計課の**本多成利氏の遺骸**があった。仰向けになって外傷も見えず眠っているような安らかな顔つきであった。それからまだ燃えている本部跡へ行った。前庭には４、５人の死体があったが、誰とも判らなかった。焼け跡の内には点々と、黒こげの死体が有るだけであった。同僚達とは思ったが、焼けて小さくなっており性の区別も付かなかった。それから基礎教室を叫びながら一巡した。人影らしいものを見出しては傍へ走り寄った。「おうい、誰かいないか」「おうい、だれかいないか」私はありったけの声を出して歩いた。守衛詰所わきの自動車置場の横まで来ると、「鬼塚先生」とかすかに呼ぶ声がする。「はあい、何処ですか。鬼塚はここにいますよ」と叫んで、よく見ると法医学教室の焼け跡に何か動くものが見える。急いでかけ寄って見ると、学生だ。無惨な火傷をうけて、上半身黒ずんで誰か誰やら判らない。「しっかりして」私はその手を肩に掛けた。学生は無言だ。もう、ものを言う元気はないのだ。先刻、私の名を呼んだのが精一杯の力だったのだ。「しっかりして、しっかりして」私は長坂を病院へ、よろよろと降りていった。その時に病院から誰か２名来た。「早く来て下さい。負傷者です」私はこの学生を２人に託した。

この分だと、まだ生存者がいるかも知れない。一刻を争うべき時だと私は思って「頼みます。あなた方は、この人を病院へ運んでから又来て下さい。私が今、負傷者を探し出しますから」とこう言ったばかりだった。黒々とした無数の死体、中のはまだ燃えている死体もあった。惨、その状況は実に見るに耐えないものであった。私も野戦に於いて死屍累々たるを見たことは一再ではなかったけれども、この時の無数の黒こげ死体程悲惨な状況を見たのは始めてであった。悪魔の一撃は折から講義中の各講堂の上から加えられた。真理探究の数百の若い学徒達は一瞬にして黒こげの死体と成ったのである。

もう無我夢中になって学校内を走り回った。瓦礫と焼け落ちた電線に脚をとられては幾度かつまずきながら負傷者を探し回った。しかし、生きている人はいなかった。教室跡は勿論、横穴防空壕や待避壕の中にも。否、生きているものは何もなかった。犬も猫も黒こげの死体だった。最後に力尽きて、本部前の待避壕の前まで、脚を引きずってやって来た。中をのぞいてみると何か黒い姿が見える。「おういだれか」と呼ぶと「おうい」かすかに答える者がある。「あ、ここにも負傷者」と思って、中へごそごそ入って行って、暗をすかして見つめると意外**国房教授**だった。「先生、しっかりして下さい。鬼塚です」「ううむ、鬼塚君か」かすかに先生は答えられた。「しっかりしてください」私は、ふと腰の雑嚢の中にカンフルが一本あったことを瞬間思い出して「先生、カンフルがあります。打ちましょうか」と言うと、「打って下さい」再び答えられた。アンプルを割る手ももどかしく、私は先生の腕に注射した。そして脈をみると脈はかすかであった。やがてカンフルがきいてか、先生はむっくり上体を起こされた。「君、煙草もっていないか」私は再び雑嚢の中から配給のひかりをとり出して火をつけ口にくわえさせた。「ああうまい」先生は元気な声を出された。「先生、しっかりして下さい」「もう大丈夫だ。」「先生、どうされたのですか」「昨日、突然グワンと来たので慌てて走ってここまで来て内に入ったきり、そのまま動けなかったのだ。誰か来ないかと思っていたが、誰も来なかった。しかし、きっと誰か来ると思ってじっとしていたのだった。山木事務官はどうだったかしら。助けてくれと呼んだ声がしたよ」「誰も皆やられました。先生、このままじっとしていて下さい。私が今、人をつれて来ます」そう言って私は病院へ引き返した。やがて人々は国房教授を担架にの

せて来た。先生も亦横穴防空壕にお入れした。

この頃、薬専の**清木教授**が一人ひょっこり力なく姿を見せられた。「ああ、無事でしたか。よかったですね」「勤労作業中をやられましてね・・・・」日頃は元気一杯の先生も、一撃を受け裏山に一晩を過ごされて、負傷の跡は表面何処にも見受けられなかったけれどしょうすいの色著しく全く元気はなかった。

その内に日が暮れかかった。飯を作らなくてはと誰言うともなしに、４、５人で食事の用意にかかった。調理所へ行ってみると米俵が積んであった。見ると煙が出ている。これは外に持ち出さなくてはと思っていると丁度その折、角尾内科の**大倉一郎氏**が来られた。「水水」大倉氏は元気に大声でそう叫びながら燃えている米俵の火を防空頭巾でたたいたり、足で踏み消したりして、ついに火を消し止められた。兎角している中に夜になり、その夜は院内の負傷者の手当に大多忙を極めた。

翌１１日以後は次第に教授をはじめ医局員、看護婦さん達も見えたので負傷者の手当はそちらにお願いして、私は学内整理に当たることにした。整理と言っても何から手をつけてよいか判らない。先ず多数の訪問者に対しなくてはならぬ。当時、交通は途絶し汽車は道の尾駅までしか来ない。しかし、学生生徒の父兄、入院患者の関係者の来訪は陸続として応接にいとまなかった。焼け残りの机、椅子を持って来て急造の大学本部を調理所横に作った。何分あの災害だったので一々の学生生徒の状況を知ることは出来なかった。「当時は授業中で学部１年は生理学教室で、同２年は病理学教室で、医専１年は解剖学教室と生化学教室で、医専２年は南講堂と衛生教室で講義中に、学部医専の上級生は各医局で勤務中に、又薬専３年は学内の勤務作業中に罹災されました」と人々にただ告げるだけであった。遙々、途中の艱苦を凌いで来られた防空服装に身を固めた父兄の姿に接しては何とも言葉の言いようがなかった。中には老夫婦揃ってのいたいたしい来訪もあった。多忙のため父兄を罹災教室に御案内することもいちいち出来るか出来ぬかの様子であったが、「倅のバンドの金具が落ちていました。お陰で倅の骨が判りました」等と礼を言われた時は実に文字通り胸をえぐられる思いであった。今、大学の裏手の山に立っている墓標はこれら数百千の親心の悲涙の結晶である。この悲しみの消える時はいつの日のことであろうか。

遺体の探索についてここに一つの出来事を書き加えたい。それは医専１年の高木君のことである。老齢の父君が国許から訪ねて来られたが、一緒に教室を探し回ったが令息らしい遺体は見あたらない。負傷後裏山に登ってではなかろうかと思って穴弘法まで登ってあの辺一帯を探し回ったが判らない。長時間の探索に疲れ切った私は、もうあきらめて山を下りることにした。道を下りながら私は「甚だ残念ながら多くの方々も御遺体が判らない方ばかりです、こんな災害ですからやむを得ないことです。」お慰めの言葉を申し上げると、「私は倅の死体を探し出せないでは家へ帰りません」と疲労しきって重い足を引きずりながらご老人は言われる。「ああ、親御のお気持ちとしては尤もなことだ。この位で探索を打ち切るように申し上げたのは、他人の冷淡と言うか、軽率というか、これはつまらないことを言ってしまってと、私は後悔の念で一杯になった。自責の苦しみに、無言のまま道を下って行った。「そうだ。このままはお帰し出来ない。何とかして見出す方法はないものだろうか」と自問自答して下りていく内に、一人の農婦に出逢った。「この辺に学

生らしい死体はみあたらなさいませんでしたか」と地獄に仏に出逢った想い出尋ねると、「あの岡の所に、あの晩、学生さんが何人も居られましたよ」と答える。「何処ですか、あ、あの岡ですか」私は新しい元気を身内に感じて、急いで岡の所に行った。近づいてみると藪陰に三人の学生姿があった。傍に寄って襟章を見ると確かに医専の生徒だ。黒ずんで、顔面は誰とも判らない。上衣のボタンを外してみると学年氏名が書いてあった。次々と開いて、三人目の上衣を開けようとした時だった。遅れて来られた老人は「これです」と叫んで遺骨の顔に取りすがられた。顔面は火傷で区別できない。しかも腐敗して異様な顔つきである。私は慌てて「これですか」と言って、上着の裏の名前を見た。間違いない。医専1年高木某と書いてあった。死者の魂が呼ぶとでも言おうか。偶然と言うにはあまりにも不思議だ。ほとんど絶望していた私にあの農婦の知らせがあり、今又、鋭い老人の感があった。同じ学生服に巻脚絆の死体の中から、永く会っていない我が子を発見する――私のこの事実を思い出す毎に、納得の行かない不思議な思いをするのが常である。

ありあわせの紙に「大学本部」と書いて貼り付けた廃墟の中に、頭部を負傷して包帯しておられる**古屋野教授**（現長崎大学長）が僅かに生き残りの私共（筆者、附属医院患者係りの**友成栄次氏**、**長井五郎氏**等）に指示を与えられるお姿は痛々しかった。当時先生はご令室を失われたのであったが、その事は一言も私共には仰らなかった。数日後、噂を聞いて之を知った私はお悔やみを申し上げると「石油をかけて焼きましたよ」と淋しく答えられたのだった。この折りの古屋野教授の御様子と又二愛児の一瞬に失われた**調教授**が実に平静に数多い負傷者の治療手当に寝食を忘れてあたられたお姿とは終生私の記憶から消えることはないであろう。当時のあの陰惨な廃墟の中の二先生の御活躍振りは悲壮とも言おうか、当時は罹災直後とて、大学関係者でも集まる人も多くはなく、それを目堵し得た人は極めて少なかったと思われる。肉親を失っても平然と行動し得た人の姿にまのあたりに接したのは私としては初めての経験であった。

あの一大変事に崇高な人格の輝き、美しい人間愛の姿は随所にあったかも知れない。しかし、あの混乱中私共の見聞は、平和な今日では不思議にさえ思われる位、僅かな極めて限られた範囲を出ることは出来なかった。**永井助教授**（後、教授）が負傷の身を担架にのせられながら浦上の負傷者を手当して廻っておられたことを知ったのはずっと後のことだったと覚えている。

時に、**角尾学長**逝去の報がもたらされた。やがて**蔵島助教授**（現教授）はじめ看護婦さん達につきそわれた御遺体をお迎えした私は、学長を抱いて附属病院玄関正面に安置した。この長崎医科大学を、附属薬学専門部と臨時附属医学専門部の大きな学園を双肩に担って立って居られた学長、一代の碩学、銀髪白せつの御姿は、いたましくも私の腕の中にあった。御生前、外貌よりは意外な位肉付きのよろしかった学長は実に軽く私の腕の中にあったのである。私は溢れる涙で足許が見えず、階段を何度かつまづこうとした。その夜、角尾内科一門の方々に先生は護られて悲しい第1夜を廃墟の中で過ごされた。

毎日、私の仕事は来訪者の応接と死体整理であった。これより先国房教授御逝去前後から**佐野教授**（現東北大学教授）は学生を指揮して学内の整理に奮闘された。間もなく復員

してきた学生達も皆協力して、毎日学友の死体の整理や図書機具の整理に一同大童であった。**高木総一郎氏**（現高木医院長、医学博士）など皆の先頭に立って活躍し、僅か数日間に革靴を踏み破る程の頑張り方であった。実際、連日の炎天下を元気に任せて一同は働いたが、驚いたことには生き残りの学生達が一人かけ二人かけ始めた事だった。病欠の原因を暑さと過労とのみ思っていたが、今思えば原子症状だったのだ。２・３日前まで元気に活躍していた学生が急に亡くなっていった。中でも今でも忘れないのは医専２年の大浦君だった。君は身軽かったので私共がはらはらするような高い所へ登ったりして実に敏捷に活動した。君が手に手厚く処理された学友は３０体を下らなかっただろう。それが原爆で亡くされた父君や兄君の法事に帰省するとの事だったが、２・３日の内に発病して終に肉親の後を追われてしまった。

こうした死臭と無数の蠅の中の整理作業、終に私も全く疲労困憊して８月末には体の調子が変になって床につくの已むなきに至った。そして当時、爆弾のガスによる病気――今から言えば原子病だが当時はそう世間では言っていた　――には「柿の葉」をせんじてのめばよいと長崎市中に言われていたが、渋い、何とも言えない味のするその「柿の葉」のせんじ汁を私も終にのまされたのであった。

★ここでこの原稿は途絶えています。その後を書こうとして止めたか、投稿を中止したためにここで筆を置いたかは図り知れません。